

坪野哲久「媼遊び」論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7151

坪野哲久「媪遊び」論

森 英一

『坪野哲久小説集』（平成十八年二月二十八日 石川県志賀町発行）に所収の小説十一作中、戦後に発表されたのは九作だが、その中で三作が初出を明らかにするのみで、残りは未発表と思われる。「媪遊び」もその一作だが、巻末に（一九五二年九月二十六日）とあつて一応成立年月は判明する。十一作はほぼ私小説で占められるが、これもそうである。

哲久の甥の若狭駿介「坪野哲久の人間とその作品」（『短歌』昭和四十六年十二月）によると、父・次六、母・よね（高浜一の菓子舗、仕館家の娘）の第六子として出生、一人息子のごとく父母の鍾愛をうけた云々とあるが、この作品でも母よね、町の大きな菓子商の娘に生まれ、へ年老いた父母と三人きりの静かな湿っぽい生活がゆるやかに云々とあつて記述が合致する。もちろん、小説である以上何らかのフィクションは施されるが、大筋において若狭文と同一であることは認められる。私小説と

いう意味はこのように作品の大まかな設定が酷似している場合をさしている。

「媪遊び」は四十過ぎの剛三という男が三年ぶりに故郷の能登の生家に母を訪ねて、そこで様々な衝撃的なこと、それは母よねに関することだが、それを見聞きしてショックを受けるという内容である。

冒頭で、生家を訪ねるべく駅に降り立った剛三をへ藤はたよりになげにがついてゐた」と描写する。読者はこの意味を一瞬取りかねる。というのは、剛三自身が病氣だからそうなのか、それとも生家が間近になつた興奮のせいなのか、あるいは東京からの旅程が長すぎて疲労困憊状態なのか、わからないからだ。ただ、続いて玄関に踏み入れる靴音がへやけにはれがましくひびきわたつた（へ底ぢからのある大きな声で）呼んだとの記述は、そういう読者の疑問を払拭して剛三の帰郷の歡びが十二分

に伝わってくる。

しかし、彼を迎えるべき母の姿はなかなか現われない。呼べども応じない。仕方なく、彼は部屋に入り込むが、（部屋といはず一家の空気が暗く重く苦しく澱み、荒涼と傾斜しかかつてゐる感じ）を抱く。この描写はこれから剛三が見聞きする出来事の内容を暗示するものである。剛三は母の居間に進む。すると、そこに、（見も知らぬ何処かの乞食女がこちらに背を向けて踞つてゐる）。

振向く気配も見せず、没我の手ぶりで、古新聞の皺を丁寧のにはしのはし、それを丹念に畳みこんである。更によく視れば、黄ばんだのや汚点の滲んだのや破れゆがんだのや大小の形とりどりの新聞切れ、色も紙質もまちまちの紙屑が母の前面に散乱し、椿や柿やその他名も形も見分け難いさまざまな木の葉の青が入り混じり、これは唯事ならぬ母に成果てたと合点するのだった。

再度の呼びかけに母は振り返るものの、格別驚きの表情もみせない。

「東京の剛三ですよ。お母さん……」

「ほう、何処のお人やら、ござらしたかいね。……」

身にまとう衣服もよく見ると、垢ばかりしている上、綿もはみ出し、懐には新聞切れや蚕豆、野菜屑などやたらに詰め込ま

れていて、異臭を放つ。

そういう母に（老衰の肉体を賭けて濾過し去つたうつくしき、しみじみと滲みでる淨かさ、おほどかさ、静かさ）を感じるものの、むしろ「世外の人」と化した悲しみが強く剛三を襲う。さらに、母をこんなふうにしたものへの憤怒さえ覚える。

剛三にとつて母は親族中でただ一人の味方であり、理解者といつてよかつた。彼は文学に従事しているが、まだ（小さい火花一つ切りだせないたらしく）の上、二十代の終わり頃からの胸部疾患の苦しみと生活苦がついてまわり、親族からは（道楽者のやる閑仕事）に携わる厄介者ぐらいにしか評価されず、それだけに帰郷の折も肩身の狭い思いをせざるを得なかつた。

母は長期間、大家族だった家計を助けるために天秤棒を肩に里行商を始めたが、物忘れの傾向が激しくなり、跡取の良吉に禁止される最近まで続けていた。二人の息子と次女を若くして失い、長女も早くに寡婦となつて母は四十近くになつて産んだ剛三に期待していた。

作品は、このように母の異常を発見した剛三とそれまでの彼と母との関係を説明する。次に、そんな状態の母に留守をさせる兄夫婦に剛三の批判が向けられる。しかし、剛三はへ一介の都市放浪者、物的無能者としての分際を弁えれば、正面切つ

て文句を言えた義理でないことも承知している。剛三は考える。

——これが人生といふものの重たさか。善良無比ともいふべき人間のいや果ての終末がこのやうに暗く望みなきものと化しるのであらうか。

異常な状態にある母をどうにもできず、ただ見守るしかないわが身と、懸命に生きてきた母がどうしてこのような目に会わねばならないのかという嘆きとが交錯するのである。

良吉の妻のたねが帰宅する。剛三を認めた彼女は義母に声をかける。

「お婆、東京のお父さん来たつたがや、嬉しかろね。……」

剛三は

「ぼくのことなんか、判つちやゑませんよ。」

と、言うが、たねは

「エエツ！ そんなことなかるがいね。……お婆、東京の弟さまやがいね。」

母はきよとんとした無感動な顔つきで答える。

「本当にね。そんながいね。……おら、何んも判らん、阿呆^アになつてしても……」

先ほどの母との会話で衝撃を受けた剛三はもしかして兄か兄嫁でも介入することによって、あるいは正常な状態を取り戻すかも知れないと思っていたが、二人の遣り取りを見て、その期

待も空しいことを承知する。一方、たねも剛三の息子の名を出すなどして正常の会話を取り戻そうと試みるが、無駄におわり、改めてよねの異常ぶりを再確認してしまう。

たねの話によると、近くに住んでいた長女が東京へ移住した一年半ほど前からこんな状態になったという。

外へ出た剛三は、母が「生ける屍」となったことに彼女の「悲運」を感じ、涙する。少年時代の思い出が次々と想起する中で、[（]母と子の意識を断絶したよね女のこと[）]が、何故に現実であらねばならぬか[（]と考える。同時に彼は、この「悲運」は個人の家だけのものでなく、よね女から無限に引出さねばならぬ。引出すことによつて彼女を生きかへらせ、永遠に力あるものとなさねばならぬ。そのことは、人の子としての意味だけではないのだ。あらゆる「悲運」をも撥ねかへす固い結び目の一つともなることだ[（]とも考える。この後者に関しては先に[（]生涯続くであらうところの思想[）]と述べられることと関連する。それが具体的に何をさすのかは記述がないので、この作品による限り不明としか言えない。

仕事を終えた兄が帰ってくる。兄弟が酒を酌み交わす場に母が連れ出される。良吉を見る母の目は穏やかで、優しく、信頼感に溢れている。剛三は二人の間に親子の愛情がまぎれもなく交流していると感じる。もしかして、兄となら母は正常な会話

をかわせるのではと思いついて、剛三は頼む。しかし、それは彼の思い込みで、兄は全てを見通していた。

明け方の海岸を逍遙する剛三は、母のことをいろいろ考えるが、依然として気持ちはずっきりしない。家に戻って、彼はどうせまた、同じ状態に戻るからとのたねの意見を無視して、母の部屋の掃除を始めた。掃除が終わると、

「もう何時やらね。帰らんらん……」

突然、よね女は悲しげな声で、かう言つた。剛三は冷水を浴びせかけられた思ひで、大きな眼をきつと見張つた。

「ここ、お婆の家やがいね。面倒な、どうしてそんなこと言うてやがいね。」

言葉ほどにもなく、ピクともしないたねのあしらひざまだつた。

「うん、うん、うん……」

とよね女は切なく呻き、

「何でこんながに成つて仕舞うたがやら、辛て、歩ばれん……」

そんな様子を見たたねは「時々、こんながやれど、ぢき癒つて仕舞うてや」と言いながら、布団を敷いてよねを休ませる。剛三はそんな仕草を見て、自分が勝手に部屋を掃除したことを悔いる。《彼岸に到り着くまでの暫しの時を、ひたすらに遊び呆けようとする》母の遊びを妨げてはいけないとも思う。

能登を去る前日、剛三は母と二人きりの時間を持つ。

よね女は懐から青葱を取出し、

「黙つて食べまつしやい。早いとこ……」

と、にこにこ笑ひながら彼にすすめた。躊躇してゐるとすかさず、

「これ食べてお湯呑むと美味いわね。」

と青葱をちぎつて口の中へ押しこんだ。剛三の顔に冷たい汗が滲んできた。苦しい瞬間だつた。

「この方が美味いぞね。……ほれ、お婆——」

夏柑をむき、小袋を割いて掌にのせてやつた。

「これ、何んやつたいね。」

彼女は素直に受けて、口に入れ、

「おお、うまい、上手ながになつとる。……いくら上げたら

よいやらね。いつとき待つてくだんせ。今、銭が無いさかい。

……」

剛三は押され通しに押され、土俵を割つて尻餅ついた恰好だつた。

「かういふみごとなものがあるちゆうわなア！」

もう一つの夏柑をたぐさ取り、涼しい声で呼びかけた。

「あんたも、こんなが一びき食べんか。どうや。あとから食べる？ そんなこと言はんと一緒に食べんかいね。」

彼の田舎では、どんな種類のものでも、一つのことを一びきと言ふのだつた。

剛三の頬に悲しい笑ひがのぼつた。

剛三は、帰郷して母と初めて会話のキャッチボールができた。たとえ、それが偶然だったにせよ、帰郷以来これまで一度も果たされなかったものが可能になったのである。

それまで母のあまりの変わりように衝撃を受け、その原因をたねを始めとする人間に押し付けようとしたりして、苦悶を感じた彼だが、終いに、母は彼岸へ着くまでの暫しの一時を遊び呆けようとしているのだ、その遊びを邪魔してはいけないと認識することで、みずからを納得させることができた。しかし、帰京前日に奇跡ともいふべき母との会話が成立した。〈悲しい笑ひ〉とはそういう母が置かれた現実を認めねばいけないという悲しみと、それでも起きた奇跡がもたらす喜びの笑ひであろう。

「媼遊び」は、以上見てきたように剛三の、母の老年痴呆に対する衝撃や悲しみ、辛さを述べ、その半生に照らし合わせての感慨やそのような状況を母に与えたものへの怒りを語る。最後に、彼は現実を受け入れて母の〈暫しの遊び〉を妨げてはいけないという諦念に達する。

もちろん、この時点で剛三に医学的知識はない。作者もおそ

らく持っていないと考えられる。人生五十年といわれた当時、この母のように八十歳過ぎまで生きる者はそんなに多くなく、従つて、このような老年痴呆を発症させる前に死亡するから、小説の素材にもならなかった。私たちの記憶では有吉佐和子「恍惚の人」がこの種の問題を扱った作品としてあげられる。昭和四十七年の作である。この頃の平均寿命は男六十九歳、女七十四歳と言われたから、「媼遊び」の頃とは格段の差がある。

「恍惚の人」は八十四歳の立花茂造が痴呆状態になっていく経過を述べる。息子の商社マン信利夫妻とは同一敷地内に住むが、余り交渉がない。ために、茂造の妻の死を契機にその異常が信利夫婦に初めて確認される。あるいは、それ以前からそういう状態だったかもしれないが、不明である。ともあれ、例年になく早い雪に襲われた頃から翌年の朝顔が咲き始める一年足らずの間に、茂造の痴呆状態は進行する。その間、信利の妻昭子の〈奮闘ぶり〉を中心に作品は描かれる。茂造は当初から信利やその妹光子も認知できない。昭子とその子・敏以外しか認知できない。食事は何回も催促するものの、テレビには興味を示さないし、入浴中も自分では洗えない。しかし、血圧等の健康データは正常である。

夜中に起きて「暴漢」と叫んだり、「ひやあ、ふやあ、ひやあ、ふやあ」と言いながら「体操」をするなどして次第に衰弱

していく。一日中オムツをしたまま眠ることが多くなり、終いに口もほとんど開かなくなり、大便を疊に塗りたくったりもする。そんな状態を経てまもなく何回目かの徘徊後、死亡する。同じ老年痴呆とはいえ、このように両作品はかなり描かれる症状が異なる。

「恍惚の人」以後、現在に至るまで、老年痴呆やそれからむ介護や性、金銭等に絡む問題をテーマにする小説は枚挙に暇がない。それほどこの素材はそんなに珍しいものでなくなってきた。しかし、「媼遊び」は早くも昭和二十七年に執筆されている。もっとも、丹羽文雄の「厭がらせの年齢」がこの五年前の昭和二十二年一月に発表されている。ただ、これは八十六歳の老女うめを登場させているものの、「媼遊び」のよねのように時、所、人についての記憶が欠如した設定ではない。そういう点で、昭和二十七年当時において老年痴呆を素材にして家族の戸惑いや苦悩を描いた作品としては、これは最も早いものに属するのではないかと考えられる。ただ、何らかの事情でこれが発表されずに今に至っているので、注目されなかっただけである。もし、これが活字になって当時公表されていたら、世間の注意を引いたことは間違いない。

〔付記〕

本文中で、よねの「非運」は個人の家だけのものでなく、云々と述べた。この作品では〈思想著作〉と関連つけられるが、それ以上の追求は不明だと述べた。このことに関して、『坪野哲久小説集』「解説」で坪野荒雄が、オリジナル原稿には次のようにあると紹介している。

「非運」は個人の家だけに限って存在するのではあるまい。敗戦も、外人部隊による占領も、民族の大「非運」であること、冷酷比類なきまでの真実さである。——非運は撥ねかへせ！

右の文の〈敗戦も〉以下が、完成稿では〈彼の心は急に生きいきと溢れてきた〉に書きかえられたという。その理由としてGHQによるメディア検閲があるのではないかと言う。本論は、いずれはこのような事実も視野に入れて考察し直す必要がある。

(本学教員)